

Ⅲ 2016（平成28）年度 「FD研修会」実施報告

1. 実施概要

2016（平成28）年度はFD研修会として3つの研修会を実施した。研修会の形式は講演会やグループディスカッション形式等を取り混ぜ、専任教員は、希望する1つ以上の研修会に参加した。今年度の研修会の内容等は以下のとおりである。

1. 内容・テーマ：「基礎学力に不安を抱える学生にどう向き合うか？－教職協働による学習支援の実践例－」

日時：2016（平成28）年6月16日（木） 16:50～18:20

場所：ユージニア館3階 アクティブラーニングスペース

講師：京都三大学教養教育研究・推進機構 児玉 英明 特任准教授

コーディネーター：人間文化学科 中里 郁子講師

参加者：28名（教員22名 職員6名）

概要：講演では、基礎学力に不安を抱える学生への学習支援について、講師の実践例を交えてお話しいただいた。退学率をはじめとする教育情報が公開されるなか、大学は実施している学習支援策について発信すべきであること、受け入れた学生の教育に責任を持つ姿勢を示すべきであると強調された。講演後のワークショップでは、参加者がグループに分かれて講演の感想を出し合い、グループから出た質問に対して講師のご意見をうかがった。

2. テーマ：「本学の情報機器を利用した授業方法」

日時：2016（平成28）年6月28日（火） 16:50～18:20

場所：ユージニア館3階 アクティブラーニングスペース
ユージニア館2階 編集工房

講師 心理学部 神月 紀輔 教授、システム管理課職員

コーディネーター：英語英文学科 大川 淳講師

参加者：36名（教員30名、職員6名）

概要：前半は、情報機器の教育利用について心理学部 神月紀輔教授による講演が行われた。講演の途中には、情報機器を用いた授業の実例として、心理学部小川博士講師担当の授業の映像を、小川講師とコーディネーターの大川講師の解説をまじえて視聴した。後半は、参加者は2つのグループに分かれ、神月教授による講習「Moodleの活用方法」または、システム管理課職員による講習「基礎的な情報機器の利用方法」のいずれかに参加した。

3. テーマ：「授業以外の学修時間の確保について」

日時：2016（平成28）年7月8日（金） 16:50～18:20

場所：ユージニア館3階大講義室

説明：教務課 小林 忍 課長

コーディネーター：各学科FD委員

参加者：26名（教員23名、職員3名）

概要：はじめに、小林忍教務課長による、学修時間の確保と単位の実質化についての説明『学修時間の確保』なぜ必要？－「教育の質的転換」の始点として－』が行われた。続いて、参加者は所属学科ごとのグループに分かれ、2つのテーマ（テーマ1「授業以外の学修時間の確保について」、テーマ2「今後の授業評価アンケートのあり方について」）についてディスカッションを行った。

参加者数

日程	テーマ	副学 長	人間文化学部		生活福 祉文化 学部	心理 学部	職員	計
			英語英 文学科	人間文 化学科				
6月16日(木)	「基礎学力に不安を抱える学生にどう向き合うか？－教職協働による学習支援の実践例－」	0	2	5	10	5	6	28
6月28日(火)	「本学の情報機器を利用した授業方法」	1	5	5	7	12	6	36
7月8日(金)	「授業以外の学修時間の確保について」	0	5	4	8	6	3	26
参加者数(延べ)合計		1	12	14	25	23	15	90

(在籍教員数：67)

2. 現状と今後の課題

(1) 「基礎学力に不安を抱える学生にどう向き合うか？－教職協働による学習支援の実践例－」

京都三大学教養教育研究・推進機構 児玉英明 特任准教授をお迎えして、「基礎学力に不安を抱える学生にどう向き合うか？－教職協働による学習支援の実践例－」というテーマで講演をしていただいた。28名の参加者があり、参加者アンケートでは52%が「大変有意義であった」、そして33%が「有意義であった」と回答し、満足度の高い研修会となった。本学においても基礎学力に不安がある学生がおり、単位不足のために留年する学生がいる現状の中で、きめ細やかな指導が必要であることを実感した。

後半のワークショップでは、講師自身の経験からいかに基礎学力の学習支援が行われてきたかを伺い、キャリア教育においていかに基礎学力の向上の対策を取り入れるかなどについても意見が出され、活発な意見交換の場となった。本学の現状も話し合われ、教職員が一丸となって、学習支援に取り組む必要があると再確認された。

(2) 「本学の情報機器を利用した授業方法」

心理学部 神月紀輔教授より、情報機器の教育利用についての講演を行っていただき、さらに心理学部小川博士講師担当の情報機器を用いた授業の映像を視聴した。その後、「Moodleの活用方法」または「基礎的な情報機器の利用方法」の講習に参加して、実際に情報機器を用いて、どのような授業

展開の可能性があるかを学んだ。36名の参加者があり、参加アンケートでは48.1%が「大変有意義であった」、そして25.9%が「有意義であった」と回答し、満足度の高い研修会となった。

「Moodleの活用方法」の参加者のアンケートによると、普段情報機器を使いこなせていないと考えていたが、この講習でいかに活用できるかがよく理解できたという意見や、VHSのデータ化の方法、Moodleの使い方などを今後実際に活かしてゆきたいという意見が出ており、情報機器を今後さらに活用するよう刺激を与えられた。「基礎的な情報機器の利用方法」の参加者のアンケートでは、書画カメラの使い方、ストップウォッチの使用、スキャナーの活用など、様々な機器を組み合わせて使用されており、授業の組み立ての中でいかに工夫できるかが理解できたという意見が出された。今後、各教員がこの研修で学んだことを各自の授業に取り入れて、有効に情報機器を使用して、より良い授業にしてゆくことが必要である。

（3）「授業以外の学修時間の確保について」

教務課小林忍課長より、学修時間の確保と単位の実質化についての説明を受け、各学科ごとに参加者が話し合って、いかにして授業以外の学修時間の確保できるかについて解決策を考え、全体会で発表するという形式で行われ、26名の参加者があった。全体的に学生の学修時間が不足する傾向にあることが再確認され、各授業でそのために工夫する必要性が話し合われた。参加者アンケートによれば、学部の教員それぞれが、学修時間の創出について工夫していることがわかったということである。また、学修時間を確保するにはどうしたらよいか、担当している授業で改善すべきことを考えることができ、各学科の現状や工夫している点が分かり勉強になったという意見が出されている。現状では、授業によっては学修時間が確保され易い科目もあるが、確保されていない科目も少なからずあるなど問題があるが、それぞれの授業で工夫する必要があることが再確認され、今後、話し合われたことをもとに改善することが重要である。

今年度の三回のFD研修会を振り返って、本学の教育の中で問題とされる課題に向き合うことができた。基礎学力に不安を抱えている学生や、単位取得が困難で留年する学生がいる現状で、いかにきめ細かく丁寧に指導をして不安を解消させて、充実した学生生活を送れるように支援していく取り組みを行うかが重要である。また、情報機器を活用して授業を活性化させたり、授業外でも学修時間が確保されるよう、様々な工夫が必要であることが再確認された。これらの課題の解決のため、今年度の研修を生かし、具体的な方策を実践して成果をあげていくことができるよう期待したい。

文責：中里 郁子（人間文化学部 人間文化学科 FD委員）